
戦国戦争自衛隊

J S D F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国戦争自衛隊

【Nコード】

N1445T

【作者名】

JSD F

【あらすじ】

実験に参加していた第三混成中隊は、対放射能実験の最中に爆発に巻き込まれて、戦国時代にタイムスリップ。

戦国の乱世で、織田信長や秀吉、家康、真田幸村などの武将と接する中で、後の未来のために戦い抜く自衛官達の物語。

現代からの武器弾薬、燃料は限られる中、未来戦術、知識を使い戦
国日の本を当時の強国にそだてあげます！

年表（前書き）

年表です。

物語が進むたびに更新していきます。○（＾○＾）○

年表

年表

・ 201X年5月15日
― 島小隊引き抜かれる

・ 201X年5月25日
― 実験中タイムスリップ

・ 1582年5月25日
― にタイムスリップ!!

―
―
―
―
―
―
―
―
―
―

年表（後書き）

これからもよろしくお願いいたします m | | (m

タイムスリップ！（前書き）

いよいよ始まりました。

出来るだけハイペースで更新
したいです。

よろしく願います（＾・＾）

タイムスリップ！

201X年5月25日

―陸上自衛隊 練馬駐屯地―

今日この場所で一つの実験が行われようとしていた。
「第三混成中隊」、これがこの部隊の部隊名である。

「状況開始！」

この部隊の中隊長である島一尉の命令で実験が開始された。

いくつかの実験を問題無くこなし、いよいよ本題である、対放射能実験が始まった。

しかし…

「異常事態発生、異常事態発生」

オペレーターの焦りのこもった声に対し、

82式指揮通信車の中にいた、この部隊の副隊長であり、中隊本部の班長も兼任する望月が聞き返した。

「どうした、何が起きたんだ」

「放射能が予想の二倍以上放出されています。原因は不明！続いて上昇中！」

異常事態に気づいたらしい中隊所属の隊員たちもざわめき始めた。

「実験中止、実験中… ¥\$£」

叫ぶ島の声は遮られた。

無線が通じなくなったのだ。

「うわー、¥\$£」

爆発が起こった。

爆風が収まると、第三混成中隊は消えていた。

10式戦車、89式装甲戦闘車、UH-60などの最新兵器を多数失った現代日本は大騒ぎになったのだが、物語の主役は、消えた方の部隊である。

タイムスリップ！（後書き）

感想書いてもらえると嬉しいです。

アドバイスなども大歓迎です。

よろしければお願いします！ (^_^)

実験用意！～タイムスリップ前～（前書き）

タイムスリップ前の話です。

よろしくお願いします。

実験用意！〜タイムスリップ前〜

― 201X年5月15日 ―

陸上自衛隊 宇都宮駐屯地

中央即応連隊隷下で小隊長を務めていた島 大和二尉は、訓練の最中に急用ということで連隊本部に呼ばれていた。

部下たちに早めの上がり进行を告げると、小隊付きの陸曹で島の右腕である掛井陸曹長と、訓練が早く終わったので興味本位で付いてきた宇喜多一曹とともに司令部へ向かった。

「いきなり急用って何でしょうね？わざわざ訓練中になって事は出撃とか？」

宇喜多がいつもの軽口を叩くが、掛井が

「んなわけないだろ。おい、宇喜多。なんもやらかしてないよな。」

と返すと

「自分ってそんな信頼ないっすか？」

などと言うので

「当たり前だっ！！」島と掛井が叫んだ。

宇喜多は、小隊一の問題児で、連隊でも名が通っていた。しかし、島や掛井、小隊の他の面々は訓練では宇喜多が一番追い込んでいることも知っていた。実際に有事になったらこんな男が日本を守るのかもしれない。無論、そんな事起きる事は無いだろうが…

そうこうしているうちに連隊長室の前に着いた。

ノックをして、

「失礼します！島二尉、掛井曹長入ります。」

宇喜多を一人待たせ、中に入った。もちろん聞き耳を立てているのだろうか…

緊急の呼び出しということで、何を言われても冷静さを失うつもりはなかったが、二人は絶句してしまった。いや、三人か。簡単にい
うと、

- ・地震やテロで原発が狙われるかも知れない。
- ・自衛隊の装備品が軽度の放射能に耐えられるか調べたい
- ・各部隊から部隊を選抜
- ・島の小隊が選ばれた

ということだ。

さらに、連隊長が言うには、

「島の階級を臨時に一つ上げ、臨時の中隊長とするそうだ。」

普段の自衛隊の組織からは考えられない事だが、島たちには心当たりが無いわけではなかった。

一月前に行われた小隊単位で行われた実戦演習で、島率いる小隊は圧倒的な強さで勝利を収めたのだ。

島が宇喜多一曹や、掛井陸曹長といった優秀であるが扱いにくい隊員を適切に指揮した結果であった。

島小隊は翌日、小隊全員で実験の行われる練馬駐屯地へ向かった。

「何ですか、この量。」

この部隊で武器弾薬の管理を担当する峯岸三尉が、中隊本部のテントで思わず声を上げた。

この部隊では、実験後に実弾を使って模擬戦を行う予定だったので、ある程度の実弾を装備して実験をするとは聞いていたが…明らかに常識外れであった。

実は、この実験の総括をしていた某二佐の単なる発注ミスであったのである。末尾に0を一つ多く付けていたのであった。

この実験自体が特殊であったので、不思議がる者はいても指摘する者はいなかった。

結果的に、この実弾の量がこの第三混成中隊の未来を左右する事になるのである。

混成中隊というだけに、富士教導団から戦車小隊、第一ヘリコプター団からヘリ四機、施設団から施設一個小隊、海自から分遣隊四名、その他にも若干名を加え、実験は開始された。

…そして彼等は旅立ったのである。

実験用意！〜タイムスリップ前〜（後書き）

次回からいよいよ戦国のスタートです。

学生なので文章力、量ともに少ないですがよろしくお願いします m

（ ー ー ） m

感想、要望、アドバイスなど頂ければ書くやる気、スピードもどんどん上がると思うのでよろしくお願いします f（ ー ー ）

異変(ここは???) (前書き)

1日に書ける量は微々たるものですが、
よろしく願います (^・^)/

異変(ここは????)

????年?月?日

―中隊本部―

大爆発の余韻が残るなか、第三混成中隊の隊員たちは、短い時間の気絶のあと、目を覚まし、車両から出てきた。

「おい、起きろ、大丈夫か？」

いち早く目を覚ました望月二尉が、同じ82式指揮通信車の中にいた島を起こした。

「大丈夫です。何が起きたんでしょう」

「分からん、ただ、予想外の爆発が起きたはずなのに、俺たちが生きてる事は確かだ。とにかく外にでてみよう」

島が望月に対して敬語なのは、望月が島の二才年上で、防衛大学校でも先輩だったからだ。望月は防衛大始まって以来の秀才と呼ばれていた。島は自分の体や、勘で戦っていくタイプなので、正反対の二人のだが、大学校時代からの親友であった。

その性格から出世は遅れ気味の望月だが、上官が島なら、と今回の副隊長を務めているのである。

外に出てみると、白い防護服を着ている隊員たちがすでに異変に気づき、騒いでいた。

「実験本部が無いぞ！」

「練馬駐屯地の隊舎はどうしたんだ！」

「つつか、道すらないんだけど」

気付いたことを、口々にいつている。

外に出た島と望月もたった2、3秒で有り得ないものを見つけた。

「なんで湖があるんだ？あとその先にあるのって……『城だ！』『』」
島と望月が、周りの隊員と同じ反応をしていると、2人を見つけた島小隊の宇喜多一曹と、真中一士、さらに島小隊の紅一点、大塚三曹がなにやら口論しながらやって来た。

「隊長、聞いてくださいよ」

宇喜多がいつもどおりくだけた調子で聞いてきた。

「どうした？」

「歴史オタクの真中が、ここは戦国時代だ。とか言い出したんです」

「どうゆづことだ？真中」

「自分は歴史オタクじゃなく、城に興味がありません……
それで、あの城は安土城です。間違いありません」

「なるほど……」

「この周りの状況と安土城、いやな予感しかないんだが……」
ここで大塚が、

「隊長、私たちはどうなってしまうんでしょうか」

女性のつぶらな眼差しはズルい

一瞬ドキッとした島だったが、望月のほうを向くと、

「とりあえず隊員の確認、装備の点検、そして偵察だな。各小隊長、及び班長を、隊員の確認を終えさせた上で集めてくれ」

「了解！」

敬礼しあうと、島は3人を連れて小隊へ、望月は中隊本部員を集め始めた。

その結果、隊員、装備、弾薬ともに異常無しということだった。

この部隊は、中隊本部、4個小銃小隊（島小隊込み）、迫撃砲小隊、戦車小隊、偵察班、特火小隊、航空隊、特殊作戦班、後方支援小隊、施設小隊などからなっている。

指揮通の隣に立てられた天幕では、15人程度の代表者たちが、島一尉を中心に話し合っていた。

「この場に留まり、様子を見るべきだ」

「偵察を送って情報を手に入れるべきだ」

「このような意見がでたあと、とりあえずここにベースキャンプを設営、軽度の陣地とし、警備につく隊員には少量の実弾も持たせることに決定した。」

偵察はその後だ。

異変(ここは?????) (後書き)

次回は偵察です。

感想、アドバイス、本当にいただきたいので、よろしくお願ひしますf (^ | ^)

また、登場兵器、戦術その他も全然変更可能なので、ご要望等ありましたらお願ひします (^ ^) ノシ

偵察？→確執？（前書き）

少し遅れてすみません。

登場人物、兵器はもう少し進んだらまとめたいと思います。

偵察？～確執～

ベースキャンプを設営する事、それと同時期に偵察隊を派遣する事は満場一致で決定された。

しかし、そこからが問題だった。つまり、銃器、実弾を携行させるのか、またどの部隊を偵察にだすのか、である。

「訳の分からん場所にはきたが、俺たちは自衛官だ。従うべき法つてもんがあるだろ。敵が攻めてきた訳でもないのに、簡単に銃を持たせていいのか？」

第四小隊小隊長の立川2尉が正論のように言った。

第三混成中隊は実験、模擬戦終了後直ぐに解隊予定だったので、ほとんどの者が顔見知り程度で、詳しくはお互いに知らなかった。そのため、島を便宜的に中隊長とと思っているのみで、意見の統一は難しかった。

立川は、大学校時代島と同じ期生であった。作戦立案、指揮能力ともに同期の中ですば抜けていた。しかし、演習となるといつも勝てない相手がいた。

島である。

今回の実験だって、実際は自分の方が中隊長に向いていると心の中では思っている。自分より先に中隊長になれたのだから、少しは自慢してくるか、皮肉を言えば良いのに、特に何も言わずに、淡々と任務をこなす島に自分より大人ということを見せつけられている

ようで、ますます嫌いになるのであった。

このねじれた感情が、後に取り返しのない結果を生むのである。

結局会議は、銃器を携帯させずに、偵察班のみで偵察させようという立川と、銃器を携帯させ、偵察班＋一個小隊で偵察させようという島で動かなくなった。

そこで望月が妥協案をまとめ、銃器を携帯させ、偵察班＋第二小隊で偵察させることにした。

今までは小隊長名＋小隊で呼んでいたが、便宜上

加納小隊 第一小隊、島直率小隊 第二小隊、涌井小隊 第三小隊、立川小隊 第四小隊とした。

望月がこの世界（？）にきて初めての昼食を中隊本部の天幕の下で食べていると、島が掛井とともにやって来た。

「望月さん、さっきは熱くなってすいません」

「気にするな。結果オーライだ。それにしても、お前と立川は昔何かあったのか？」

「はあ、演習でこてんぱんにしたら目の敵にされてしまっているよ
うで」

「そうか。で、そちらは、掛井曹長だったか」

「は！第二小隊付き曹長の掛井です」

「で、望月さん、へりからの連絡は？」

「ああ、あの城はやはり安土城らしい。OH-1改からの映像を真中に見せた所、間違いないということだ。そしてその城下に大規模の城下町も見える」

島は、少し考えると、

「ではやはり我々は……、戦国時代に……」

「全てはお前たちの偵察結果次第だな。まだ一般隊員に知らせるには早すぎる」

掛井は望月に、

「では偵察対象はその城下町で？」

「そうなるな。聞き出す内容は現在の年号と時刻、さらにこの世界の情勢も知りたい。どうせ島も行くだろうから、護衛しっかり頼む」

「そついうことだ」

島は言うど、拡声器で中隊全体に命令を伝えた。

「偵察開始時刻は今より30分後の13:30。偵察参加部隊はそれまでに本部前に集合。その他の隊員は同時刻に施設科を中心にベースキャンプの設営を開始せよ！」

偵察？～確執？（後書き）

書くベースでもっと早めていきたいです。

なかなか戦闘シーンまでいかないの。

これからも感想、アドバイス、ご要望ありましたらよろしくお願
いします (^ - ^) /

偵察？～偵察開始！～（前書き）

続きです。

たくさんの人に見ていただいているようで、とても嬉しいです。〇
^ | ^ 〇)

偵察？～偵察開始！～

本部門前に集まったのは、偵察班8名＋第二小隊27名の計35名である。

指揮は第二小隊小隊長の島が務める。中隊長でもある島が直接出向くのは、望月も含め反論もあったが、直接確認したいという意志に押し切られた形だ。その間中隊の指揮は望月副中隊長が務めることになった。

「本作戦の目的は、現在我々のおかれている状況の確認と、またこれからの行動を決めるための情報収集である」

島が、3列に整列した隊員たちに説明した。

さらに、

「前者は第二小隊に、後者は偵察班に任せる。第二小隊は城下町での聞き込み、偵察班は安土城と思われる城の偵察だ！実弾については、極力使用するな」ただ、緊急時の場合はその場の最上級者の判断で使用を許可する」

「以上だが、何か質問は？」

なにも無いようだ。

「よし、状況開始！」

偵察班は軽装甲機動車2両に、第二小隊は高機動車3両と73式小型トラック1両に乗って前進を開始した。

ちなみに第三混成中隊の小銃小隊は、どれも4人編成の分隊×2で8人編成の班、班×3 + 小隊本部3人の計27名で構成されている。

前進、といっても、城下町の手前の小山の下までなので、1キロもない。2、3分ですついでしてしまう。

「高機動車—————」

「良い空気だな」

高機動車のロールバーにMINIMIを取り付けて周囲を警戒している宇喜多が、運転中の工藤一土に話しかけた。

「そうですね。噂では、自分たちは戦国時代に来てしまったとかいうのも聞きました」

「それを確かめるのが俺達の任務だ。大丈夫、島さんに付いていけばなんとかなる」

「さあ、着いたようですね」

なぜわざわざ移動に車両を使ったかというところ、万が一の時の逃走手段として、また車載無線機を臨時の情報基地として使い、分かった情報をリアルタイムで中隊へ伝えるためだ。

―車両集結地―

車両の偽装を終えると分隊規模で4人1組となり偵察を開始した。ちなみにこの車両集結地に第二小隊から1個班+島、衛生の大塚の計10人が車両の防衛と情報集計要員として残った。MINI MIを周囲を見渡せる位置に設置させると、島は中隊本部に連絡させた。

「こちらフタマルシマよりHQ。作戦準備完了。状況開始」

「モ子了解」

しかし島たち第二小隊は気付かなかった。

木陰からの女の視線と、この世界で一番高い建造物からの視線にある。

偵察？～偵察開始！～（後書き）

これからも、ご感想、アドバイス、ご要望ありましたらよろしくお願ひします（＾－＾）ノ

あと、1582年頃の戦国武将で、自衛隊とともに活躍させたいというような武将がおりましたら、教えて頂きたいです。
教えて頂いた人物は出来るだけ登場させます！！！！

ただ自分がアイデア不足なのですが、どんどんお願いします！

偵察？〜1582年〜（前書き）

久しぶりの更新です。

これからもよろしく願いしますf(^_^)(^_^)

偵察？〜1582年〜

「分隊よりフタマル」

「フタマル島だ」

「商人と思われる男性から情報を入手。現在の日付は天正10年5月25日。さらに、この場所の領主は、織田前右府まきらのうぶなるものらしいです。さらに、上様とも呼んでいました。以上、通信終わり」

「フタマル了解」

無線機から手を離れた島はパジェロの後部に座って銃器の点検をしていた真中一士に尋ねた。

「おい、織田前右府って信長のことか？」

「はい、そうです。いわば通称のようなものですね。さらに、天正10年っていいますと、西暦1582年です。つまり……」

「本能寺の変ってことか？」

「隊長もご存知なんですね」

「ああ、そのぐらいはな……」

「あの、私たちは……」

2人の会話を黙って聞いていた衛生係の大塚三曹が口出しした。

「その言葉はさつきも聞いたぞ。でもなんともいえん。情報をおつめ、それからだ」

その後も各分隊から情報が集まったが、分かったことは次の事である。

・現在の年代は西暦1582年

・現在の時刻は15:20で、隊員たちの腕時計とくるいはなかった。

・ここ安土の領主は織田信長

・その他の大名も史実と同じである。

ということである。

島はそれらの集まった情報を中隊本部の通信班員に伝えると第二小隊の隊員を戻すことにした。さらに、現在時を知った島は、偵察班をそのまま明日の朝まで潜伏偵察させることにした。第三混成中隊に選抜された猛者たちなら何の問題もないであろう。

そのとき車外から、

「おっおい！あれ」

「やばいんじゃない？」

などという声が聞こえてきた。島は近くにいた掛井に、

「どうした、何かあったか？」

と尋ねると、

「周囲を監視していた隊員が何か発見したらしいです。確認します」

と言っている間に、工藤一士が双眼鏡を手にやって来て、

「隊長！民間人らしき人が、盗賊のような連中に襲われそうになってます。どうぞ」

島は双眼鏡を受け取ってそちらを見ると、花畑のような所で、3人の綺麗な着物を着ている少女たちと、彼女たちの侍女らしい3人の計6人が、いかにもというような荒くれ者達に囲まれていた。荒くれ者達はこの状況を楽しんでいるようで、今すぐ襲いかかるという訳ではなさそうだが、時間の問題だろう。

「どうしますか？」

掛井が尋ねてきたが、島の、そしておそらく掛井の腹も決まっていた。

「救助する。小隊の面々が戻ってくるにはあと2、30分かかるだろうから、ここにいる10名のなかから、1個分隊と俺、あと怪我人がでるかもしれないから、大塚も連れて行く」

「では、自分も」

「いや、掛井曹長はここに残って指揮を執ってくれ。それで、小隊

が揃ったら、そのままベースに戻れ。俺たちも救出に成功次第直接戻る」

「自分が救出部隊の指揮を執った方が良いのでは？」

「いや、救出時には必ず発砲する事になるだろう。隊員たちに躊躇させないためにも俺がこの時代で最初に引金を引く！」

そこまで言うと掛井は根負けしたようで、

「かないませんな。了解しました。ベースで会いましょう」

島は救出に、軽装甲機動車2両、高機動車1両でいくことにした。高機は助けた人の輸送用である。偵察班の分人数がうくので、第二小隊も全員乗れるだろう。まあ歩いてもたいした事のない距離なのだが。島は彼女らを救出したら、そのままベースに連れ帰って、話を聞くつもりであった。身なりからして、身分がある程度は高そうなので、しっかりとした話が聞けるだろう。第二小隊に早めの帰還を命じたのもそのためである。

すべては救出に成功してからののだが。

「高機動車——————」

「前進よーい、前へ」

島の声に合わせて、3両の救出部隊が前進を開始した。といっても人数の関係で各車両2人しかいないのだが。

島は大塚の運転する高機の後部座席でMINIMIの安全装置を解除した。すでに幌は取り外してある。

偵察（1582年）（後書き）

これからも、ご感想、ご要望、アドバイスなどありましたらよろしく
お願いします（＾・＾）ノ

戦国時代の武将で自衛隊と共に戦わせたい武将がいましたら、
どんお知らせ下さい。

偵察？！初めての対人射撃（前書き）

アクセス数4000突破しました（^-^）
毎日増えていくのはとてもうれしいです。

これからもよろしくお願いします。

偵察？～初めての対人射撃～

「目視で目標まで距離300」

高機の運転をしている大塚三曹が叫んだ。

「速度20に落として前進！Lav1、Lav2も続け！」

「了解」

盗賊らまで50mといったところで、島は車両を停止させた。

3両は草や枝で偽装しているのでまだ気づかれていないようである。

そこで島は作戦に従って部隊を3つに分けた。

作戦とは、まず左右からLav2両が派手に機関銃を撃ちながら接近。盗賊を出来るだけ引きつけて姫(?)と侍女(?)らしき6人から可能な限り引き離す。ここでの射撃はわざと外して、なめさせる必要があるだろう。そしてある程度距離が離れた所で島、大塚の乗る高機が突入し、彼女等を救出する。突入段階の射撃では、敵に命中させる必要があるだろうので、この役割は島自ら務める。そして救出が完了次第最大速度で離脱する。相手は全員徒歩なので、追いつかれる事は無いだろう。

……というものである。

タタタタッ タタタタッ タタタタッ

MINIMIの射撃音が聞こえてきた。高機はさっきの位置から動

いていないが、車高が低いのでギリギリまで気づかれずに接近できそうだ。

―軽装甲機動車1号車――

「おい、真中、スピード上げろ、追いつかれるぞ」

Lav1号車の上でMINIMIで追ってきた盗賊らしき男たち4人を牽制していた吉田二曹が、運転している真中に怒鳴った。

「ダメです。これ以上スピード上げたらついてこれなくなります。

隊長が離脱するまではこのスピードをキープします。敵はそちらで何とかしてください」

「何とかするつつつても、威嚇だけじゃな」

と不満を言いつつも、足下に銃弾を撃ち込んで、5mの距離を維持し続けていた。

それを追う盗賊たちも、こちらの奇々怪々な乗り物と、鉄砲に驚きながらも、銃撃が当たらないことを余裕に持って、前進していた。それが畏だとも気づかずに……。

―高機動車――

「よし、突入開始！」

十分に引き付けたと考えた島が、大塚に命じた。

それでもまだ8人の盗賊が、姫たちの周りを囲んでいた。いきなり草むらの一部が動き出したのを見て、彼らは驚いたようだが、健気にも槍や刀を持って向かって来た。

「武器を捨てて降参しろ！」

島は最後の希望をかけて言ったが、もちろん止まらずに向かって来た。

タタタツ　タタタツ　タタタツ

島は覚悟を決めると、ついに人の命を奪うために引金を引いた。圧倒的な光景であった。こちらに迫ってきた6人の盗賊たちは左から次々と崩れていった。盗賊らしき男たちもボロボロの鎧のようなものをきていたが、MINIMIの5・56?弾の前には紙にも等しかった。

島は彼らの戦闘力を奪うために、足元を撃つたので、死んだものはいなかったが、悲しむ暇も、後悔する暇も無かった。

「隊長、応急処置しますか？」

こちらを向いてきた大塚が意外に冷静な顔をしていたのにびっくりしたが、よく見ると、唇を噛み締めて泣きそうになるのを必死にこらえていた。

当たり前だ。島も大塚も、人に向かって銃を撃つたのは初めてだし、ましては軽くは済まない怪我をさせたのである。

ただ、2人に立ち止まっている暇は無かった。

「いや、そのまま放棄、姫さんたちの救出、収容を最優先にする」

「了解」

追っ手があつという間に撃破されたのに驚いたか、残っていた盗賊の幹部らしき男2人は、何かわめきながら逃げて行った。彼らを追撃して殺すことも出来たが、島はそこまで非情にはなれなかった。この甘さが自衛隊のこれからの行動を左右する事になるのだが……

―軽装甲機動車1号車――

「隊長が行動を開始しました。今まで逃げて来た分、やっちゃって下さい」

Lavの運転をしていた真中が、逃げ続けていた事に相当ストレスを感じていたのか、珍しく感情的になって言った。

「あつたり前だ！おりゃ……え……？」

「二曹、どうしました？これ以上接近されると危険です」

「ま、まずい。弾切れだ。真中、距離とれ！リロードする」

「すみません、沼地にはまりました。抜けるまでスピード上げられません」

機関銃は小銃などと違って重く、軽くは扱えない。無理やりリロードするか、それより早く敵が接近するか、吉田は後者と判断した。レールに取り付けられているMINIMIから手を放すと、腰のホルスターから9ミリ拳銃を抜いた。走っている車の上から拳銃を当てるなど、アニメか映画の世界だけだが、それでも装填中の9発で4人を倒さなければ、死ぬだけである。

先頭の奴との距離、4 m、3 m、2 …

バンツツ

撃破。崩れ落ちる。

「次！」

2人目 バンツツ

撃破。倒れる。

だが、次に吉田が見た光景は、自分に槍が迫ってくる瞬間であった。

「ま、間に合わない！！」

偵察？？初めての対人射撃（後書き）

ご意見、ご感想、ご要望よろしくお願いしますf (^| ^)

特に自衛隊と共に戦わせたい武将募集しています (o ^ | ^ o)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1445t/>

戦国戦争自衛隊

2011年6月3日21時39分発行